

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究アンケートと実践報告の結果

中学部では、4年間取り組んできた研究において見出してきた視点や取り組み内容が、「実態把握」「目標設定」「段階的な評価」「評価のフィードバック」のそれぞれの段階で有効に機能したかについて、アンケートを実施した。回答は「とても有効」「まあまあ有効」「どちらともいえない」「あまり有効でない」「全く有効でない」の5段階で設定をした。中学部の研究のまとめとして、アンケートの結果と、実践報告の結果について、以下に記す。

1-1 「実態把握」についてのアンケート結果

(実態と目標設定を明らかにするためのワークシートについて)

問1 指導に活かす実態把握として、年間①の表(自立活動の6区分に整理・分類して見取ったもの)を「中学部将来像・目標設定シート」の強み弱みの見取りに抜き出せるようにしたことは有効だったか
『中学部 将来像・目標設定シート(P. 69 参照)』

とても 有効	まあまあ 有効	どちらとも いえない	あまり有効 でない	全く有効 でない
2	3	1	0	0

- 実態把握は、小学部とのつながり・高等部とのつながりが、今後より強く表れるようになった。
- 中学部でも、実態把握の共通の視点が見えた。どの教員が実態把握を行っても、同じ視点で実態把握ができるようになった。
- 型があることで、実態把握がわかりやすくなった。
- 既存の書式、研究で作成した多くのシート、それらが今年度の研究でまとめられ、負担が減った。
- もともと作成している年間①が、改めて実態把握のツールとして位置づけられた。
- このシートの使用は、初めてで分からないことだらけでしたが、前年度までのシートがあったので、実態把握や目標設定ができました。「なにか形式がある」というのは強みと思う。
- 強みと弱みを記入するためには、別のシートで実態を整理する必要があったが、はじめに年間①の実態把握のシートがあることで、記入する際の参考になった。
- 3年間の長期目標を目指して、1年ごとに段階的に考えていた目標を引き継いだ。やり易いこともあったが、他の教員からの意見をもらったり、学部で検討をしたりする機会があっても良い。

1-2 「目標設定」についてのアンケート結果

(実態と目標設定を明確化するためのワークシートの見直しについて)

問 2 年間指導目標設定のためのワークシート は有効に機能していたか

『中学部 将来像・目標設定シート(P. 69 参照)』

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
1	3	2	0	0

- 必要な視点を強みと弱みがあることで意識することができた。
- 4年間の研究を通して、年間目標の設定方法について深められた。個々の教員がそれぞれのやり方で1から設定するのではなく、学部として強みや弱みを大切にしている点などの共通の大切な点をもとにして、どの教員も共通の方法で目標を設定できるようになったことが大きいと思う。
- 流れに沿って記入していくと、目標が定まるので、必要な視点を確実におさえながら目標を立てることができた。
- 年間指導目標は大きい目標のため、指導仮説、期待する姿から授業の目標を設定する際に、必ずしも関連性が十分保たれていると言えないこともあると感じた。

1-3 「段階評価基準表」についてのアンケートと実践報告の結果

(ワークシートを利用した授業づくりについて)

問 3 年間指導目標→単元目標に細分化→授業に反映→評価に反映 を行うシートの活用は有効だったか

『段階評価基準表(P. 73 参照)』

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
1	2	2	1	0

- 単元の中で、どの程度のペースで学習内容が進むか、十分考えられて良かった。
- 1つの単元の段階評価基準表を作成するのは負担が大きいですが、目標から指導や支援を考える際に非常に参考になった。
- 1人でも負担が大きい段階評価基準表を、クラス全員分、どの授業でも行うべきものか、疑問がある。
- 今年度中に、全生徒(6人×3クラス)で段階評価基準表を基にした実践を行う目途が立てられなかったため、来年以降の活用は限定的になってしまうかもしれない。
- 段階評価基準表は、目標設定・指導支援・評価の考え方としては良いが、実務の中で実施は難しい。

1-4 「評価の方法とフィードバック」についてのアンケートと実践報告の結果 (ワークシートを利用した形成的評価の積み重ね)

問4 学習評価と指導評価をわけて、形成的評価の積み重ねをすることで、目標設定や今後の指導・支援にフィードバックすることを繰り返し行ったが、その形成的評価の積み重ねは個別の指導計画へのフィードバックをするうえで有効だったか『学習と指導の振り返りシート(P. 73 参照)』

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
0	4	1	1	0

○UDLの項目ごとに振り返ることができたので、とても整理しやすかったし、次の支援を前よりも確実に実施できるようになった。

○授業評価にUDLの視点を用いることで、生徒の学習スタイルに応じた、柔軟な授業づくりを実践できた。

○シートを利用することで、実態、個別の指導計画の目標、手立て、評価が共有しやすく、担当教員が共通理解を図りながら授業づくりができる。

○授業評価、学習評価を積み重ねることによって、個人の主体的な学びを目的として用意した手立てが、他の生徒の主体性へと繋がった。

●評価は、授業毎に時間を置かず書き出さないと、正確な評価を忘れてしまう。学習と指導の振り返りシートを記入することは、負担感が大きかった。

●形成的評価の積み重ねには有効であるが、個別の指導計画にどのように繋げていくか決まっていないため、難しさがあった。

●PDCAサイクルを継続的に実施しながら実践を行うために、個別の指導計画に反映させ易いワークシートを検討する必要がある。

●学習と指導の振り返りシートは、学習評価や指導評価を行なう視点としては良いが、非常に多くの時間を要するため、実際の業務の中で全ての生徒に行うことは非常に難しい。

●学習評価の3つの観点とUDLを組み合わせると、よりよい評価ができる。

2 研究の成果

2-1 実態把握・目標設定に関する成果

今年度の中学部の研究成果の一つが、共通の視点による実態把握の仕組みを示したことである。本校では平成 26 年度より、全校共通の書式である年間①（実態把握）を全ての児童生徒に作成している。今年度中学部では、この年間①の書式を実施する際、13 点の共通把握項目を設定することで、どの教員が実態の把握を行っても、同じ視点で実施できるようにした。そして、昨年度までの研究成果である、根拠のある目標設定を行うための書式、『中学部 将来像・目標設定シート（P. 69 参照）』の冒頭部分に、この年間①の書式を加えたことにより、目標の根拠となる強みや弱みの分析がより明確になった。また、小学部や高等部と同じ実態把握の書式を中学部でも使用することになったことにより、アンケート結果にもあるように、学校全体として一貫した実態把握が可能となり、今後、児童生徒の引き継ぎの際も連携がとりやすくなった。

さらに今年度は、今までは別のシートで行っていた「強み」と「弱み」の分析を、「将来像・年間指導目標設定シート」の一連の流れの中で行えるようにした。このことにより、目標設定までの流れを学部で共通認識をする際、複雑な説明作業が緩和されることとなった。アンケートからも、記入者の負担が減ったという意見があげられ、今後も持続可能なワークシートにすることが、研究の成果である。

2-2 授業目標と支援の設定に関する成果

アンケート結果と実践報告から、段階評価基準表を作成することで、生徒の目標や支援を計画的に捉えることができるようになったことが示された。また、1 枚のシートの中で目標と支援の計画が整理できるため、授業における対象生徒に対する目標や指導・支援について、教員間の共通理解を図ることが容易になり、より個に応じた支援を行えるようになった。以上より、単元や授業における生徒の目標と、それに伴う支援の設定において、段階評価基準表を作成することは有効であると考えられる。

2-3 評価と評価のフィードバックに関する成果

アンケートの結果と実践報告から、学習評価と指導評価を 1 枚のシートで行える「学習と指導の振り返りシート」を利用することで、1 時間ごとに授業について振り返り、改善策を検討する機会とすることが示された。また、シートの記入を通して、実態・目標・手立ての評価を実施できることから、これらの評価を関連づけながら詳細に行うことが容易になり、授業の担当教員間で必要な情報を共有することが実施し易くなった。

学習評価については、段階評価基準表を用いることで、毎時間の授業で確実に生徒の学びの状況の評価できるようになった。指導評価については、観点として UDL を用いており、「生徒の主体的な学びのため」という目的をもって指導の評価を行うことができるようになった。この観点で評価を行うことで、自分の知識や経験のみで考えるだけでは難しかった支援の方法を、考えることができるようになった。

本研究では、単元ごとの評価を蓄積させ、比較・分析することで総括的評価として個別の指導計画へ反映させることとした。このようにして実施した個別の指導計画の評価は、次年度の実態把握や目標設定へフィードバックすることができる。この、フィードバックを有効に機能させる仕組みを示すことが今年度の成果の一つであると考えている。

3 今後の課題

3-1 実態把握・目標設定の課題

本研究で、『中学部 将来像・目標設定シート (P. 69 参照)』を活用する過程において、「年間指導目標は大きい目標のため、指導仮説、期待する姿から授業の目標を設定する際に、必ずしも関連性が十分保たれていると言えないこともある」という意見があげられた。

『中学部 将来像・目標設定シート』は、目標設定までの根拠を明確に示したシートではあるが、どんな教員が作成しても自動的に目標が決まるものではない。個々の教員の発達の見立てや、障害特性のより深い理解、そして、本研究の成果についての十分な理解があることで、一人一人の生徒の強みや弱みをより把握し、期待する姿を見立てながら、年間指導目標と関連した授業目標の設定ができるようになっていくものであると考えている。

4年間の研究で築き上げた、実態把握から目標設定までの方法論や、研究を通して用いられてきた「強みと弱み」「期待する姿」「指導仮説」「行動の基となる能力」「支援の方法と程度」などの言葉とその考え方は、中学部の実践を行う上で不可欠のものであり、学部の貴重な財産である。今後は、毎年新しい学部教員集団で、新しい年度の教育活動を開始する際に、目標設定シートを通して、これらのことの共通理解を図って取り組んでいくことが望まれる。

3-2 授業目標と支援の設定に関する課題

段階評価基準表について教員に行ったアンケートでは、「あまり有効ではない」と「どちらとも言えない」の合計が、「有効である」と「どちらかと言うと有効である」の合計を上回っている。これは、作成に対する教員の負担が大きいことや、今後の活用が難しいことが要因であると考えられる。

段階評価基準表は単元の計画表であり、作成をするためには、単元の開始前に、目標や支援を具体的に、段階的にイメージする必要がある。この作業を的確に行うためには、特別支援教育の教員としての高い専門性が求められ、単に経験や知識があるだけでは、実現可能な計画を設定することは難しい場面もあると考える。

また、段階評価基準表は、一つの授業の一人の生徒に作成するだけで多くの時間と労力を必要とし、全ての生徒に作成することは、実際の業務を行う中では難しい。基準表の効果を認めつつも、限られた生徒の限られた実践にのみ作成可能な基準表を、今後どのように活用していけばよいのか、複数の教員から検討すべき課題であるという意見があげられている。また、この表は単元の進行の中で、先の目標や指導支援の修正を重ねていくことが前提とされている。学部研究を進めていく中で、修正を重ねていくことが明白である基準表に多くの時間を要することについて、疑問を感じる教員もいた。

段階評価基準表の、「先の見通しをもって、段階的に目標や指導支援を設定する」という考え方自体は、教育的効果の非常に高い実践が期待できるものであり、この考え方に到達したことは中学部研究の大きな成果である。今後は、この段階評価基準表の活用については、教育実践の中で、考え方自体を活用する方法を検討していく必要があると思う。

3-3 評価と評価のフィードバックに関する課題

学習評価については、本研究では段階評価基準表を用いて行った。アンケートや、学部研究を進める中では、毎授業評価を記入することは負担が大きいという意見があげられている。しかし、本来教員は、どの授業を行う際も、全ての生徒に対し目標を設定し、目標に対する評価を行なっているはずである。今回の研究では、評価を段階評価基準表に記入するという手続きに負担を感じる教員が多かった。今後は、研究で導いた考え方を活かしながら、評価手続の簡略化について、検討をしていく必要がある。

指導評価については、本研究ではUDLの考え方に基づく「指導の振り返りシート」を用いて行った。しかし、「指導を振り返る」という目的でシートを利用してしまうと、「生徒の主体的な学びのため」という本来のUDLの観点から離れてしまう場面があることが、実践を通して示唆された。今後は、指導評価を行なうツールとして指導の振り返りシートをどのように活用するか、そして、UDLの本来の観点とどのように整合性を見出していくかについて、検討が必要である。

評価のフィードバックについては、授業の評価を個別の指導計画に反映させる手続き（比較・分析・評価）について、明確な学部共通の方法が存在していない。そのため、各教員が授業で評価した生徒の姿から、各教員の見立てを経て、個別の指導計画の評価・分析を行っている。その際、ややもすると、目標に対する評価から離れて評価を行うケースも見られている。今後は、各単元の形成的評価からどのように総括的評価を導くか、また、どのように目標に沿った評価を導いていくか、学部内で検討していく必要がある。

<引用・参考文献>

- ホール・トレイシー・E. /マイヤー・アン/ローズ・デイビッド・H. (編) バーンズ亀山静子 (訳).
UDL 学びのユニバーサルデザイン.2018
- 文部科学省.学習評価に関する資料.2016
- 文部科学省.特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領.2017
- 文部科学省.特別支援学校学習指導要領解説 各教科編 (小学部・中学部) .2018
- Center for Applied Special Technology:CAST.学びのユニバーサルデザイン (UDL) ガイドライン
version 2.2graphic organizer.2018
- Katie Novak & Kristan Rodriguez.UDL 実践者の成長のループリック.2018